

いんせぱらぶる
inseparable

「変半身(かわりみ)」

原案:村田沙耶香 松井周 作・演出:松井周

孤高のクリエイターが 分かちがたく 混じり合う試み



唯一無二とも孤高とも評される作風のふたりが、意気投合し、同じ原案をもとに舞台と小説を発表する。
ジャンルをまたぐ今年屈指の注目作の第一報をお届けする。

オリジナリティが評価の大部分を占めるクリエイターにとって、誰かと似ていると言われること、とりわけそれが同時代の誰かというのは、普通、好ましくないと思われる。ところが喜々としてそれを受け入れる組み合わせがある。

11年に『自慢の息子』で岸田國士戯曲賞を受賞し、安楽死や成長促進剤など近未来的な題材と、日本の土着的な風土を混ぜ込み、最終的には人間のおかしみを浮かび上がらせる松井周。16年に『コンビニ人間』で芥川龍之介賞を受賞し、明るく穏やかな筆致でいつの間にか普通と異常の主客を逆転させてしまう小説家、村田沙耶香。

どちらも強烈な個性を放つ作風で知られるが、出会ってすぐにお互いが趣味嗜好と思考回路の類似性を認め合い、inseparable(インセパラブル)というプロジェクトまでスタートさせた。Inseparableとは、切っても切れない、分かち難い、という意味で、ひとつの原案をもとに『変半身(かわりみ)』というタイトルの、村田は小説、松井は舞台を発表する。

この原案は、17年から取材旅行や合宿、試演会と、多忙なふたりが丁寧な共同作業を重ねてつくられたもの。ある架空の島について、歴史や地形、伝統行事や風習、気候や生態系などを一緒に考えていき、その島の物語をそれぞれが自分のフィールドで作品にする。島のどの時代、どの地域を切り取り、どんな人物や動物を登場させるかは自由だが、相手が考えた、あるいは共同作業の過程でどちらが考えたかわからなくなった固有名詞などが登場するというのが興味深い。イメージとしては、松井と村田の思考が溶け合っただけのクラウドにまとめられ、ひとりひとりがそこから必要なものをダウンロードし、自分だけのインターフェイスを通してアウトプットすると考えれば良いだろう。近年、作家同士、また、作家とミュージシャンなどの共作が増えており、その形はさまざまだが、ここまで自分を相手に預けるの

は、厳密な意味でも共作と言って差し支えないし、何が出てくるのか想像がつかないという意味でかなりの意欲作と言える。

村田の小説『変半身』は11月下旬に発刊予定、ほぼ同時期の11月29日から12月11日にシアターイーストで上演される松井作・演出の舞台『変半身(かわりみ)』は、キャストもまた、興味深い。松井作品は何度も経験済みの金子岳憲、日高啓介、能島瑞穂。昨年、舞台『レインマン』で松井の厚い信頼を得た宝塚出身の安蘭けい。余談だが松井は宝塚の大ファンで、東京の宝塚劇場でアルバイトをしていた経験もあるほど。初参加組は、唐組所属で近年さまざまな舞台で活躍する大鶴美仁音。ドラマ『ワンダーウォール』で注目され、岩松了作・演出の舞台『空ばかり見ていた』に出演していた三村和敬。そして台湾から来日する王宏元。

内容について松井は「舞台は小説と違い、ホントの人間の肉体と舞台空間を使ってウソを語っていかなくてはなりません。でもよく考えると、人間は前の時代につくられた慣習を信じたり、疑ったり、別のルールに乗り換えたり、自分たちで新しい常識をこしらえたりして日常を生きています。言い換えると、常にフィクションに所属し、いくつものフィクションに侵食されて生きています。ということは、ウソをまとった人間がそこに存在していればそれでいい。ウソとホントの間に生きているグレーな人間を淡々と描いていくつもりです」と語るがこれには、自分にとって白か黒だけで事実を判断してしまうオルタナティブ・ファクトが蔓延する現在の風潮に、一石を投げたい思いがあるという。

「もともと人間には、どんな意見に対しても自分なりのウソとホントがモザイク状になった“遊び”の部分があるはずなのに、今はそれがないがしろにされている。そんな凝り固まった空気に穴を開けたいというのが僕の狙いです」

共作はもちろん競作でもある。舞台と小説のどちらかではなく、ぜひとも両方を体験し、Inseparableな企てを見届けたい。

文:徳永京子

11月29日(金)～12月11日(水)
シアターイースト

詳細はP16・17へ

原案:村田沙耶香 松井周

作・演出:松井周

出演:金子岳憲 三村和敬 大鶴美仁音 日高啓介 能島瑞穂 王宏元 / 安蘭けい

三重、京都、神戸公演あり



村田沙耶香

松井周

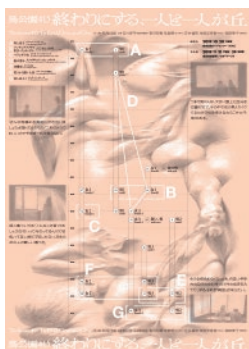
©Sayo Nagase

©平岩亨

eyes plus 鳥公園 #15「終わりにする、一人と一人が丘」

11月21日(木)~24日(日) シアターイースト

詳細はP16へ



新体制へ進む前の、鳥公園のアタマの中とは？

主宰と劇作家と演出を西尾佳織が兼任していたこれまでの体制から、今後3年、作品によって3人の演出家が西尾の戯曲を手掛けるという新たな劇団の形をスタートさせることを発表した鳥公園。現行の演劇のあり方を根本から問う大きくて柔らかな問いが、過去2回、アトリエイーストで展開された『鳥公園のアタマの中』展とつながっているのはうれしい。今作は、西尾が主宰・作・演出の3役を兼ねるとりあえず最後の作品となる。純度100%の西尾のアタマの中、のぞいておきたい。

文:徳永京子

作・演出:西尾佳織(鳥公園)

出演:石川修平(劇団俳優座) 菊沢将憲 鳥島明(はえぎわ) 花井瑠奈 布施安寿香(SPAC) 和田華子(青年団)

【お問合せ】鳥公園(syuz'gen) 03-4213-4290

eyes plus ワワフラミンゴ 12月のワワフラミンゴ「くも行き」

12月18日(水)~22日(日) シアターイースト

詳細はP18へ



バカバカしいのに油断ならない独自の世界

タヌキと人間が当然のように対等に会話する人食ったストーリーや、まったく予測できないテンポ、次第に浮かんでくる「ここには深い哲学が隠されているのではないか」という疑念で、中毒者を増やし続けているワワフラミンゴ。ギャラリーやカフェなどで公演を重ねてきた彼女たちが、13年の「芸劇eyes番外編『God save the Queen』」以来、久々にシアターイーストで公演を行う。久々に出演する俳優も多く、ビギナーもすでに夢の中の人、ワワフラの世界をぜひ劇場で体験してほしい。

文:徳永京子

作・演出:鳥山フキ 出演:北村恵 生実慧 佐伯さち子 椎橋綾那 多賀麻美 柳沢茂樹 森すみれ

【お問合せ】ワワフラミンゴ wawaflamingo@gmail.com

芸劇dance 田中泯ダンス 踊りに惚れちゃって!「形の冒険 II — ムカムカ版」

2020年1月10日(金)~16日(木)※13日(月・祝)休演 シアターイースト

詳細はHPへ



外から見えなくても、僕はオドリの中にいる。

2018年に12年ぶりに劇場公演を再開し、その強烈な存在感で劇場空間をオドリの宇宙に変えた田中泯。「映画やドラマに出演していても、僕はオドッテイルのです」と語るダンサー田中泯は、常に身体表現の最前線を切り拓く存在として、ジャンルを越えて注目を集めてきた。'20年初頭を飾るソロダンスは、カラダとオドリをより深く鋭く追究し、装置や音響などにも新たな企みを加えて「地球と一緒に生きるカラダ、必死にカラダになろうとするオドリ」を観客に突きつけることになるだろう!

出演:田中泯

COMING UP NEXT 2020.1-3

演劇・ダンス ラインナップ

1月25日(土)~2月5日(水)
シアターイースト
「エブリ・ブリリアント・シング」

2月7日(金)~12日(水)
シアターイースト
「星の王子さま」

2月7日(金)~16日(日)
シアターウエスト
eyes plus てがみ座「燦々」

2月15日(土)~23日(日) シアターイースト
eyes plus 鳥丸ストロークロック「まほろばの景2020」

3月2日(月)~15日(日) シアターイースト
「カノン」作:野田秀樹 演出:野上絹代

3月6日(金)~8日(日) プレイハウス
勅使川原三郎×佐東利穂子×庄司紗矢香(ヴァイオリン)

3月28日(土)・29日(日) シアターイースト
二兎社ドラマリーディングvol.2

※日程等には変更が出る場合があります。